大分県文化財調査報告書　第112輯

尾槽（おこぎ）遺跡（第2次調査区・第5次調査区）

－局部改良求来里（くくり）川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2000

大分県教育委員会

尾槽（おこぎ）遺跡（第2次調査区・第5次調査区）

－局部改良求来（くくり）里川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2000

大分県教育委員会

序　文

日田市は「水郷日田」と呼ばれ、日田盆地の各所には、その名にふさわしい豊富な清流が見られます。これらの河川流域は、いにしえの人が生活するうえで適した環境であったと考えられ、先史時代から原始時代の遺跡が豊富に点在しています。

本書は平成９年７月から11月にかけて実施した局部改良求来里（くくり）改修工事に伴う、尾漕（おこぎ）遺跡の発掘調査報告書です。

尾漕（おこぎ）遺跡は、古墳時代後期の竪穴住居跡と掘立柱建物跡を伴出する自然堤防上の集落の一部と推測されます。この調査の結果、当時の社会や地域の歴史を知る上で、大変貴重で重要な資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・保存並びに教育・学術の振興、及び地域文化の向上のために活用されることを期待いたします。

最後に、この調査にご協力いただきました関係者各位及び地元の方々に対して、衷心より感謝申し上げます。

平成12年３月

大分県教育委員会

教育長　田　中　恒　治

例　言

本書は平成９年度に実施した局部改良求来里川改修工事に伴う大分県日田市大字西有田所在の尾漕遺跡第２次調査区・尾漕遺跡第５次調査区に係る埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

1．埋蔵文化財発掘調査は大分県土木建築部の依頼を受けて大分県教育委員会が実施した。
2．遺構の実測・写真撮影は、調査担当者・調査員が分担して行い、遺物実測・トレースは村上久和・原田昭一が中心となり行った。
3．原稿の執筆・編集は村上・原田が協議して行った。
4．付論の執筆は佐々木　章（大分短期大学助教授）が行った。
5．遺物は大分県教育庁文化課文化財資料室に保管している。

目　次

Ⅰ．調査の経緯 …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査の体制 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 2
　1　地理的環境 …… 2
　2　歴史的環境 …… 2
Ⅲ．調査の成果 …… 5
　1　第２次調査区 …… 5
　　a）住居跡 …… 5
　　b）溝状遺構 …… 6
　　c）掘立柱建物跡 …… 6
　　d）その他の遺構・遺物 …… 16
　2　第５次調査区 …… 18
　　a）住居跡 …… 18
　　b）溝状遺構 …… 21
　3　まとめ …… 23
付論　尾漕遺跡土壌のプラント・オパール分析から見た求来里川東岸の水田開発 …… 28

挿図目次

第１図　尾漕遺跡（第２次調査区・第４次調査区・第５次調査区）位置図 …… 1
第２図　尾漕遺跡周辺の遺跡位置図 …… 3
第３図　尾漕遺跡第２次調査区ＳＨ１平・断面図 …… 5
第４図　尾漕遺跡第２次調査区遺構配置図 …… 7～8
第５図　尾漕遺跡第２次調査区ＳＤ１平面図・土層図 …… 9～10
第６図　尾漕遺跡第２次調査区ＳＤ１出土遺物実測図(1) …… 11
第７図　尾漕遺跡第２次調査区ＳＤ１出土遺物実測図(2) …… 12
第８図　尾漕遺跡第２次調査区ＳＤ２平面図・土層図 …… 13
第９図　尾漕遺跡第２次調査区ＳＢ１平・断面図 …… 14
第10図　尾漕遺跡第２次調査区ＳＢ１出土遺物実測図 …… 14
第11図　尾漕遺跡第２次調査区ＳＢ２平・断面図 …… 15
第12図　尾漕遺跡第２次調査区ＳＢ３平・断面図 …… 15
第13図　尾漕遺跡第２次調査区ＳＢ４平・断面図 …… 16
第14図　尾漕遺跡第２次調査区ＳＢ５平・断面図 …… 17
第15図　尾漕遺跡第２次調査区出土遺物実測図 …… 17
第16図　尾漕遺跡第５次調査区遺構配置図 …… 18
第17図　尾漕遺跡第５次調査区ＳＨ１平・断面図 …… 19
第18図　尾漕遺跡第５次調査区ＳＨ１出土遺物実測図 …… 19
第19図　尾漕遺跡第５次調査区ＳＨ２平・断面図 …… 20
第20図　尾漕遺跡第５次調査区ＳＨ２出土遺物実測図 …… 20
第21図　尾漕遺跡第５次調査区溝状遺構平・断面図 …… 22
第22図　尾漕遺跡第５次調査区ＳＤ１・２出土遺物実測図 …… 22
第23図　尾漕遺跡遺跡周辺の遺跡位置図 …… 24
第24図　尾漕遺跡（第２・４・５次調査区）位置図 …… 26
第25図　尾漕跡跡（第２・５次調査区）周辺遺跡の遺構配置図 …… 27
第26図　プラント・オパール定量分析手順 …… 28
第27図　尾漕遺跡第２次調査区東北部壁面断面図 …… 29
第28図　尾漕遺跡第２次調査区東北部壁面土壌のプラント・オパール密度から推定した埋没植物量 …… 30
第29図　尾漕遺跡第２次調査区ＳＤ１土壌プラント・オパール密度から推定した埋没植物量 …… 30
第30図　尾漕遺跡第２次調査区ＳＤ２土壌プラント・オパール密度から推定した埋没植物量 …… 31
第31図　尾漕遺跡第２次調査区南北連結部東部壁面断面図 …… 31
第32図　尾漕遺跡第２次調査区南北連結部東部壁面土壌の
プラント・オパール密度から推定した埋没植物量 …… 31
第33図　尾漕遺跡第５次調査区南壁面断面図 …… 31
第34図　尾漕遺跡第５次調査区南壁面土壌プラント・オパール密度から推定した埋没植物量 …… 32

図版目次

図版1　尾漕遺跡第2次調査区遠景（西から）…… 33
図版2　尾漕遺跡第2次調査区（上空から）…… 34
図版3　尾漕遺跡第2次調査区ＳＨ１…… 35
尾漕遺跡第2次調査区ＳＤ１（中央から南側を望む）…… 35
尾漕遺跡第2次調査区ＳＤ１（中央から北側を望む）…… 35
図版4　尾漕遺跡第2次調査区ＳＤ２（北西から）…… 36
尾漕遺跡第2次調査区ＳＤ２（南東から）…… 36
尾漕遺跡第2次調査区ＳＢ１…… 36
図版5　尾漕遺跡第2次調査区ＳＢ２…… 37
尾漕遺跡第2次調査区ＳＢ３…… 37
尾漕遺跡第2次調査区ＳＢ４…… 37
図版6　尾漕遺跡第2次調査区ＳＢ５…… 38
尾漕遺跡第5次調査区調査風景…… 38
尾漕遺跡第5次調査区遠景…… 38
図版7　尾漕遺跡第5次調査区ＳＨ１…… 39
尾漕遺跡第5次調査区ＳＨ２…… 39
尾漕遺跡第5次調査区ＳＤ１～３…… 39
図版8　尾漕遺跡第5次調査区プラント・オパール採取場所（1）…… 40
尾漕遺跡第5次調査区プラント・オパール採取場所（2）…… 40
図版9　尾漕遺跡第2次調査区ＳＤ１出土遺物…… 41
尾漕遺跡第5次調査区ＳＨ１出土遺物…… 41
尾漕遺跡第5次調査区ＳＨ２出土遺物…… 41

表目次

表1　植物体中の珪化機動細胞密度…… 29

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

大分県土木建築部から、平成９年、局部改良求来里川改修工事の実施に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて協議がもちこまれ、路線内に存在する尾漕遺跡第２次調査区の試掘確認調査の実施について検討を行った。平成９年６月日田市教育委員会に試掘調査を依頼し、その結果をふまえて、県文化課、日田土木事務所河川課、日田市教育委員会文化課の３者が協議し予定地内の遺跡約1,500㎡について本調査の実施を決定した。本調査は平成９年７月～平成９年９月に行ったが、調査終了後、平成９年10月に尾漕遺跡第５次調査区において新たに遺構の存在が確認されたため併せて平成９年11月まで発掘調査を行った。

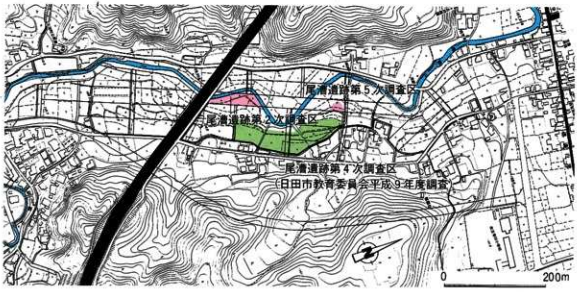
2　調査の体制

尾漕遺跡第２次調査区

調査委員　佐々木　章（大分短期大学助教授）
調査主体　田中　恒治（大分県教育委員会　教育長）
調査担当
調 査 員　村上　久和（県文化課　副主幹）
　　上野　淳也（県文化課　嘱託）
　　児玉　美香（県文化課　嘱託）
　　衛藤　麻衣（県文化課　嘱託）

尾漕遺跡第５次調査区

調査委員　佐々木　章（大分短期大学助教授）
調査主体　田中　恒治（大分県教育委員会　教育長）
調査担当　首藤　　善（県文化課　主任）
調 査 員　村上　久和（県文化課　副主幹）
　　甲斐　寿義（県文化課　主査）



第１図　尾漕遺跡（第２次調査区・第４次調査区・第５次調査区）位置図

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

尾漕遺跡の存在する日田市は、大分県の東端に位置し、福岡県に接する位置にある。周縁を山稜部で囲まれる盆地を形成し、山稜部には古くより杉が植林され「日田杉」として全国的にも知られている。盆地中央部で西から注ぐ玖珠川と南から注ぐ大山川が合流し、三隈川として筑後平野に流れ、水に囲まれた環境は「水郷（すいきょう）日田」として親しまれている。盆地中心部は三隈川とその支流により多くの沖積地を形成し、盆地を取り巻く台地部は阿蘇溶結耶馬渓溶岩で形成されており、さらにそれを取り囲む高地部は新三紀層を基盤とする筑紫溶岩で形成されるという地形を作り出している。近年、九州横断自動車道の開通により、大分・福岡・久留米など大都市圏との交通も便利になり、近世、九州のヘソとして位置付けられた地理的環境は、ますますその便宜性を増しつつある。

尾漕遺跡は、有田・東有田の比高差50～60ｍの低丘陵に挟まれた幅約200ｍの狭隘な開析谷に蛇行して流れる求来里川流域の河岸段丘上に広がる集落遺跡である。調査前の現況は、丘陵部から平野部に移る地形変換点に現在の集落が位置し、その前面に肥沃な水田が広がっており、その水田下に遺跡が存在していた。

2　歴史的環境

日田市は大分県を代表する遺跡密集地域であり、盆地周辺の台地・低丘陵上に数多くの遺跡が存在している。

旧石器・縄文時代は遺跡数も比較的少なく、規模も小さい。縄文時代早期～中期の遺跡は手崎遺跡をはじめ数は少ないが、縄文時代後期～晩期になると葛原遺跡をはじめ段丘上を利用し、その数・質とも充実してくる。特に、三和教田遺跡からは、県下最大級の土偶が出土しており、目を見張る遺物も見られなくはない。

弥生時代は、県下において最も充実した様相を持つ地域として注目される。遺跡は盆地全域に広がり、特に沖積平野を見下ろす台地縁辺に多く分布する特徴を持つ。特に、吹上遺跡・小迫辻原遺跡は、大分県を代表する遺跡であり、吹上遺跡からは、竪穴住居跡・貯蔵穴を中心とした集落遺跡のほしに甕棺墓を中心にした墓地が広がる。中には武器形青銅器・装飾品が副葬された「日田の王墓」に想定できる墓も存在し、日田盆地の拠点集落に位置付けられる遺跡である。また、小迫辻原遺跡は弥生時代終末～古墳時代初頭の環濠集落と豪族居館と想定できる環濠施設が発見されている。

古墳時代には、盆地全域に古墳・横穴墓がつくられる。古墳時代前中期には首長墓である前方後円墳は確認されておらず、天満１・２号墳、有田古墳・護願寺１号墳など後期にいたり、前方後円墳が出現する。このほかにも県下を代表する装飾古墳として位置付けられるガランドヤ古墳など、古墳文化の様相は高い水準をもつ。

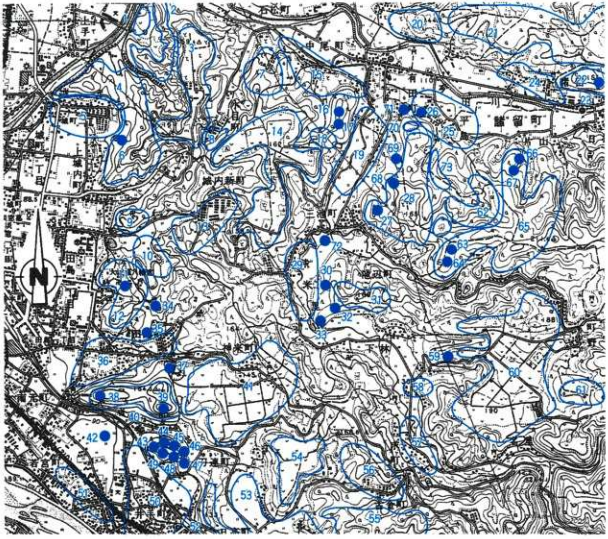
奈良時代・中世には、台地・沖積平野の区別無く、盆地全域において掘立柱建物跡・墓などの遺構が確認されている。

尾漕遺跡周辺の歴史環境

それでは、今回調査対象地となった尾漕遺跡の周辺遺跡はどのような様相を持つのであろうか。

縄文時代は比較的、遺跡密度は小さく、石ヶ迫遺跡で縄文時代早期の集石遺構５基が発見され、また有田塚ヶ原遺跡では縄文時代後期の陥し穴48基が発見されたほか、数遺跡で同様な遺構が確認されたにすぎない。

弥生時代にはいると遺跡は爆発的に増加し、本調査区東側丘陵頂部北端に位置する祇園原遺跡では弥生時代中期後半～後期中葉の竪穴住居・掘立柱建物群・甕棺墓群などからなる集落遺跡が発見されている。同様に祇園原遺跡が位置する丘陵北部裾部の平島遺跡でも、弥生時代後期を中心にした甕棺墓・箱式石棺墓・石蓋土壙墓・土壙墓からなる墓地が広がる。また、本調査区西側丘陵の延長部に位置している佐寺原遺跡でも弥生時代中期～後期の竪穴住居跡・貯蔵穴・小児用壺・甕棺墓等からなる集落が発見されており、弥生時代は中期～後期にかけて主として丘陵部に集落立地を求めていたことがわかる。しかし、一部には尾漕遺跡第４次調査区に



1．夕田遺跡　2．夕田横穴墓群　3．佐寺原遺跡　4．大蔵古城跡　5．慈眼山瀬戸口遺跡　6．丸山古墳　7．堂園遺跡
8．水目横穴墓群　9．塚原遺跡　10．赤迫遺跡　11．薬師堂山古墳　12．大波羅遺跡　13．湯尻遺跡　14．中尾原遺跡
15．宮ノ下遺跡　16．中尾１号墳　17．中尾２号墳　18．大迫遺跡　19．尾漕遺跡　20．ゴス園遺跡　21．須ノ原遺跡
22．城山古墳　23．城山遺跡　24．世尊寺遺跡　25．平島遺跡　26．平島古墳　27．尾漕古墳　28．狐迫遺跡　29．馬方遺跡
30．ガニタ３号墳　31．倉迫遺跡　32．ガニタ１号墳　33．ガニタ２号墳　34．丸尾神社古墳　35．丸尾古墳　36．会所宮遺跡
37．田島古墳　38．鳥羽塚古墳　39．会所山古墳　40．会所山遺跡　41．元宮遺跡　42．鬼塚古墳　43．法恩寺１号墳
44．法恩寺２号墳　45．法恩寺６号墳　46．法恩寺５号墳　47．法恩寺７号墳　48．法恩寺４号墳　49．法恩寺３号墳
50．上井手遺跡　51．柳ノ本遺跡　52．平松遺跡　53．日高遺跡　54．東寺原遺跡　55．稗手遺跡　56．古金遺跡
57．着木遺跡　58．求来里平鳥遺跡　59．亀ノ甲遺跡　60．町野原遺跡　61．奥ノ迫遺跡　62．平鳥横穴墓群
63．有田塚ヶ原１号墳　64．有田塚ヶ原２号墳　65．片山原遺跡　66．クエト１号墳　67．クエト２号墳　68．尾漕２号墳
69．長迫遺跡　70．祇園原遺跡　71．塔ノ本古墳　72．森ノ元遺跡　73．石ヶ迫遺跡　74．有田塚ヶ原遺跡

第２図　尾漕遺跡周辺の遺跡位置図（１／25,000）

見られるように若干は平野部でも確認できるが、その主体が丘陵部であることは日田盆地全域で共通する様相と考えられる。

古墳時代に至ると、尾漕遺跡の東部丘陵裾緩斜面部の長迫遺跡や尾漕遺跡A地区において竪穴住居跡群が確認されているように丘陵上から住居跡が消える。古墳時代は、埋葬空間である墓地の立地と生活空間である集落の立地が明確に異なり、生活空間を低位部に求め、埋葬空間は丘陵部を利用する特徴がある。今回の調査対象区の周囲に位置する丘陵上には古墳時代中期の中尾1・2号墳や尾漕2号墳、5世紀末～6世紀初頭の尾漕古墳、6世紀後半の有田塚ヶ原1号墳などをはじめとした小円墳の古墳が主として丘陵先端を利用して営まれている。また、このような古墳と同様に、舌状丘陵先端に位置する大迫遺跡では、古墳時代中頃の石蓋土壙墓・土壙墓・石棺墓などからなる墓地が発見されており、円墳とは階級階層差が認められる下位の墳墓が丘陵周縁に存在する。このほかにも6世紀後半の佐寺横穴墓群、6世紀半ば～7世紀半ばの平島横穴墓群などをはじめ、古墳時代後期に横穴墓が流行することも日田盆地共通の様相である。

奈良時代には、尾漕遺跡の東部丘陵緩斜面の長迫遺跡では古墳時代に引き続き奈良時代の竪穴住居跡を中心とした集落跡が、また、尾漕遺跡の求来里川流域の段丘上に位置する森ノ元遺跡では古代の掘立柱建物跡を中心とした集落遺跡が発見されている。このほかにも、有田塚ヶ原遺跡では奈良時代の掘立柱建物跡群が、石ヶ迫遺跡では奈良～平安時代の掘立柱建物跡・竪穴住居跡からなる集落がそれぞれ発見されており、奈良・平安期の集落は古墳時代のそれを継承する場合が多いと考えられる。

中世には、多様な集落立地が想定できるが、森ノ元遺跡では掘立柱建物跡を中心とした集落遺跡が発見され、中には、小刀1点、青磁碗・皿をおさめた土壙墓が発見されている。掘立柱建物柱穴群の場合、時期の比定が困難であるが、中世集落に付属すると考えられている屋敷墓としての土壙墓の存在に着目するなら尾漕遺跡第1次A地区調査区などからも確認されており、中世期も多くは前代の集落の継承のもとにあることがわかる。

参考文献

土居和幸・行時志郎編『平成4年度（1992年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1994

土居和幸・行時志郎・松下桂子編『平成5年度（1993年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1995

行時志郎編『平成7年度（1995年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1997

土居和幸編『平成8年度（1996年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1998

土居和幸編『平成9年度（1997年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1999

友岡信彦・松本康弘編『佐寺原遺跡・尾漕遺跡群・有田塚ヶ原遺跡群』大分県教育委員会　1998

村上久和・友岡信彦・桑矢和徳編『日田条里遺跡群・佐寺横穴墓群・大迫遺跡・白岩遺跡・下鍋垣遺跡』大分県教育委員会　1997

土居和幸・行時志郎・永田裕久編『馬形遺跡』日田市教育委員会　1998

Ⅲ．調査の成果

1　第２次調査区（第４図、図版１・２）

求来里川流域の段丘上に広がる水田地帯の下に遺構群が確認できた。溝状遺構２条と竪穴住居跡１基、さらに溝状遺構を挟み東側に大型掘立柱建物跡１棟と西側に小型掘立柱建物跡４棟が求来里川に向かい緩やかに傾斜する緩傾斜地に確認できた。また、小型掘立柱建物跡４棟の北側においては低湿地が確認でき水田跡の存在が想定できた。

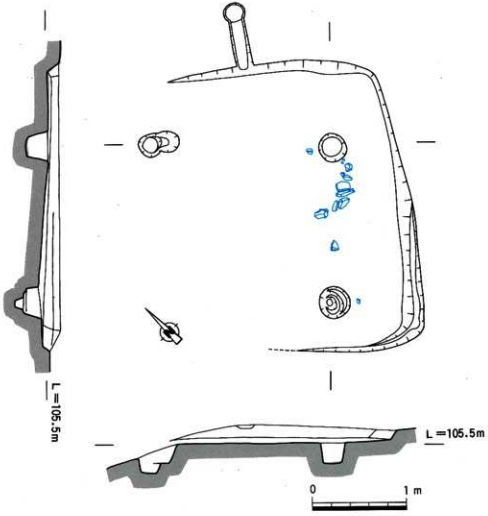
その詳細は以下の通りである。

a）住居跡

ＳＨ１（第３図、図版３）

北調査区南端のＳＤ１西側に検出できた隅丸方形の竪穴住居跡である。地形の傾斜が東から西に下がっているため住居跡の西側部分及び西端の柱穴は確認できなかった。住居跡南北長3.1ｍを測り、東西長もほぼ同じ数値におさまるものと考えられる。検出面から床面までの最深深度は0.2ｍを測る。主柱穴は４本であり、深さ0.2～0.3ｍである。

出土遺物は少なく図化できる大きさの遺物は出土しなかった。



第３図　尾濃遺跡第２次調査区ＳＨ１平・断面図（1/40）

b）溝状遺構

ＳＤ１（第５・６・７図、図版３・４・９）

北調査区中央に地形の等高線に沿い緩やかにカーブしながら南北方向に走る。検出幅２～2.5ｍ、調査区南端部・同中央部・同北端部の深さはそれぞれ90㎝・62㎝・74㎝を測る。このことから水の流れをある一定方向に流すものではないことがわかる。ＳＤ１北側及び南側部分では溝底を幅約20㎝、深さ約10㎝さらに深く掘りさげている。溝中から比較的多くの遺物が出土し、特に中～上層で確認できた。ＳＤ１は南調査区にも延びるが、南調査区の検出面がＳＤ１の床面のレベルに相当するため、溝底をさらに掘り下げた小溝のみ確認できた。なお、ＳＤ１はＳＤ２につながっている。

出土遺物は第６・７図に示した。

第６図２・３・４・５は弥生土器であり、ＳＤ１出土遺物のほとんどが古墳時代後期のものであることから、流れ込みの遺物であると考えられる。２・３は甕の口縁であり、４・５は高杯の脚部である。

第６図１・６・７・８、第７図１・２・３・４は須恵器であり、第６図９・10・11・12は土師器である。第６図１は復元口径20㎝を測る甕の口縁部であり、内外面の調整は回転ナデである。第６図６は復元口径13㎝を測る坏蓋で、内外面の調整は回転ナデを施し、天井部外面には回転ヘラケズリがみられる。第６図７は復元胴部最大径15㎝を測る短頸壺であり、内外面の中位より上半を回転ナデ調整し、外面底部は手持ちヘラケズリが施されている。第６図８は復元胴部最大径16㎝を測る壺であり、内面に同心円文の当具痕が見られる。外面には回転カキ目痕がみられるが、タタキ調整の上から施されたものと考えられる。なお、外面肩部に「×」のヘラ記号が見られる。第６図９は甑の把手である。第６図10は脚端部径10.8㎝を測る高坏脚部であり、胎土は精選され、明るい橙色を呈する。成形はロクロ成形であり、脚部にタテ方向のヘラケズリが施されているほかはナデ調整である。第６図11は口径7.8㎝、高さ16.5㎝を測る直口壺であり、外面に丁寧なナデ、内面に下から上に向かう丁寧なヘラケズリが施されている。第６図12は復元口径22.5㎝、復元胴部最大径22.3㎝を測る甕であるが、内外面とも剥離が著しく、器面調整は不明である。

第７図１～４はいずれも甕である。１は肩部であり、復元頸部径18.8㎝を測る。体部内面に同心円文の当具痕がみられ、外面肩部に平行タタキの上から回転カキメが施されているのが観察できる。２は復元胴部最大径57㎝を測る甕である。体部内面に同心円文の当具痕がみられ、外面には平行タタキの上から回転カキメが施されている。３は復元胴部最大径29.5㎝を測る壺甕類であり、体部内面の同心円文の当具痕がみられ、外面には平行タタキの上から胴部最大径部のみ一部に回転カキ目が残されている。４も３と同様に復元胴部最大径23.6㎝を測る壺甕類であり、体部内面に同心円文の当具痕がみられ、外面には平行タタキの上から胴部最大径部のみ一部に回転カキ目が残されている。

ＳＤ２（第８図、図版４）

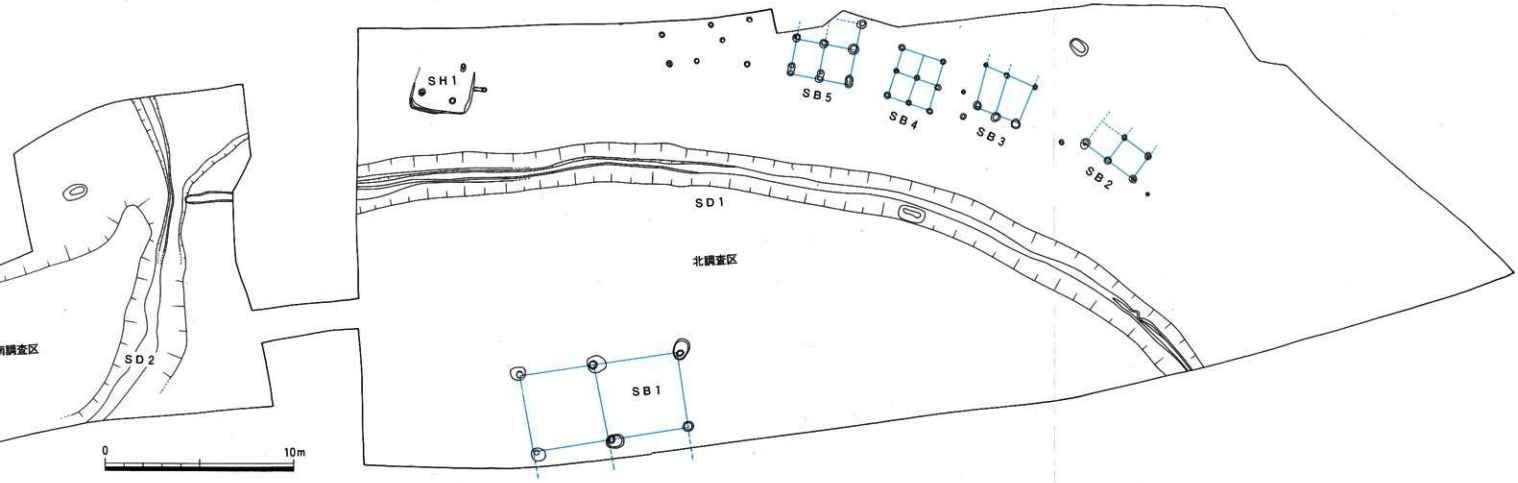
南調査区中央に東西方向に走る。溝底部のレベルを比較した場合、南東から北西方向に流れる流路だったことがわかる。検出幅1.8～3.4ｍ、深さは30～40㎝程度である。なお、ＳＤ２中央部より西側ではＳＤ１と同様に溝底にさらに幅20～100㎝、深さ５～10㎝の小溝を設けている。ＳＤ２の方向からＳＤ１の流れを集め、求来里川に注いでいたものと想定できる。

c）掘立柱建物跡

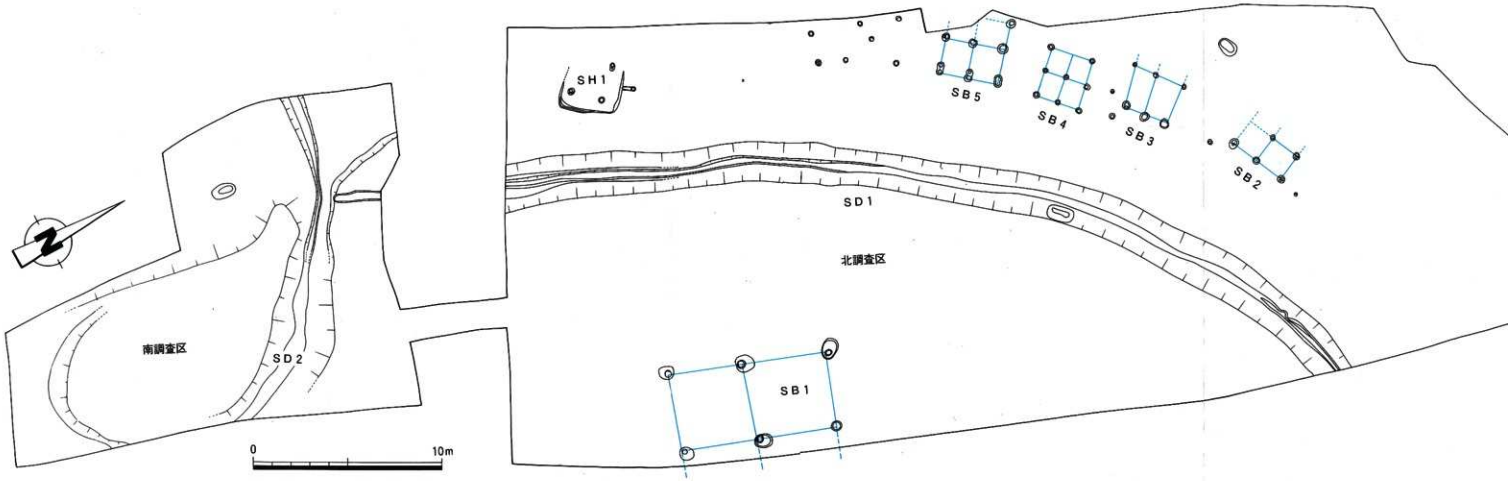
北調査区中央に南北に走るＳＤ１を境に、東側に大型掘立柱建物跡１棟と、西側にやや小さい４棟の掘立柱建物跡が検出できた。西側へ下がる地形の傾斜から柱穴が一部削平されてはいるが、西側４棟の掘立柱建物跡はいずれも総柱であり、南北１列に並ぶため、同時存在の可能性もある。なお、ＳＢ５に隣接して南側に柱穴群が確認できるため、ここにも１棟存在していたものかもしれない。

ＳＢ１（第９・10図、図版４）

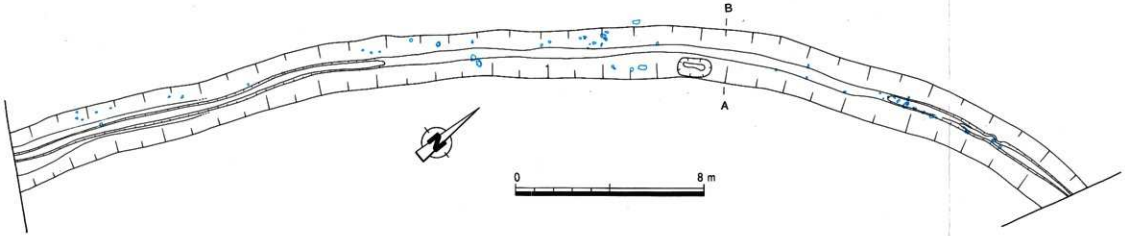
ＳＤ１東側に位置する掘立柱建物跡である。東西２間分のみ調査区内にあり、柱穴はさらに東側に延びる

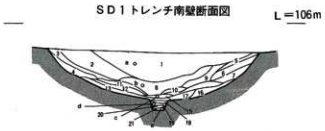


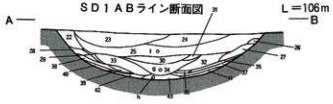
第4図　尾濃遺跡第2調査区遺構配置図（1/200）

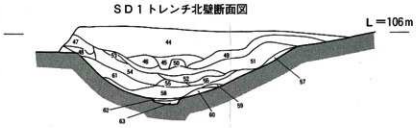


第４図　尾濃遺跡第２調査区遺構配置図（1/200）





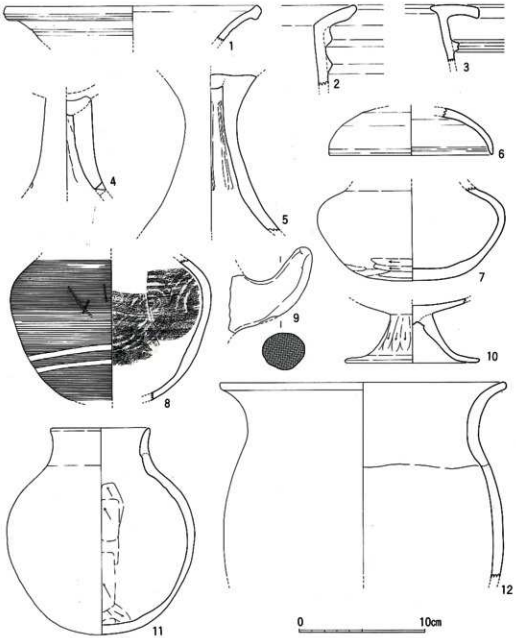




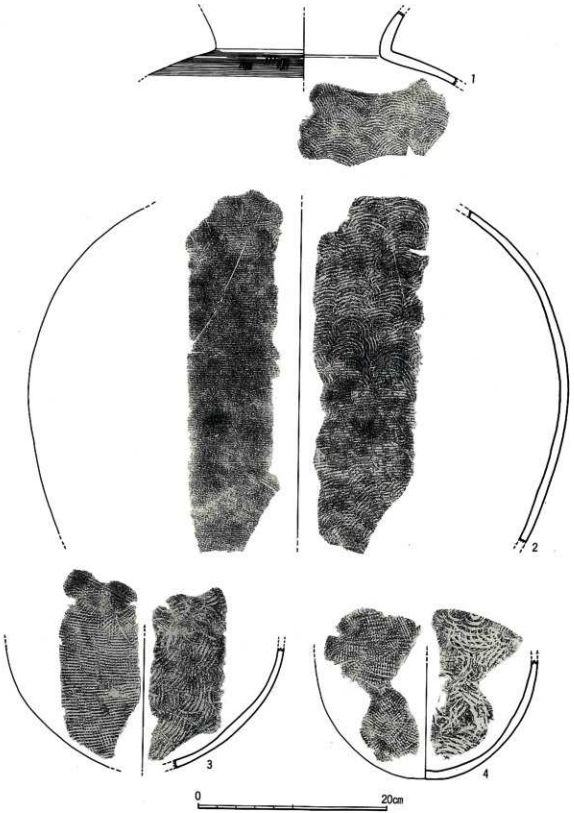
1 暗赤灰色土(鉄分を含む)
2 暗赤灰色土
3 赤灰色土
4 暗赤褐色土
5 灰褐色土
6 灰色土(鉄分を含む)
7 褐色粘質土
8 青黒色粘質土
9 暗紫灰色粘質土
10暗青灰色粘質土
11灰褐色粘質土
12黒褐色土(鉄分を多く含む)
13暗青灰色粘質土
14褐色粘質土(鉄分を含む)
15緑灰色砂質土
16暗灰色砂質土
17淡黒色粘質土
18青灰色砂礫土
19暗緑灰色砂礫土
20にぶい赤褐色砂礫土
21オリーブ黒色砂質土
22暗赤褐色土
23暗赤褐色土
24暗赤灰色土
25赤黒色土
26褐色土
27黄灰色土
28暗褐色土
29暗灰色土
30オリーブ灰色土
31黒褐色土
32褐灰色土
33灰色砂質土
34オリーブ黒色粘質土
35暗赤灰色土
36紫黒色土
37暗オリーブ褐色色
38暗灰黄色粘質土
39暗黒色土
40灰オリーブ粘質土
41暗紫灰色粘質土
42暗緑灰色粘質土
43暗青灰色砂礫土
44明褐灰色土
45明褐灰色土
46明褐灰色土
47明褐灰色土
48明褐灰色土
49にぶい黄橙色土
50にぶい黄橙色土
51灰黄褐色土
52灰黄褐色土
53褐灰色土
54褐灰色土
55淡灰色土
56褐灰色土
57黄橙色土
58褐灰色土
59褐灰色土
60褐灰色土
61灰黄褐色土
62褐灰色土
63褐灰色土

第5図　尾濃遺跡第2調査区SD1平面図・土層図（1/60）・（1/40）

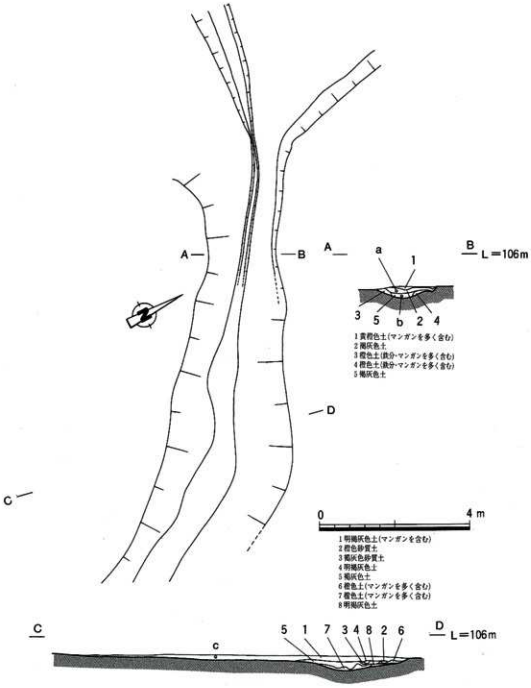
0　2 m



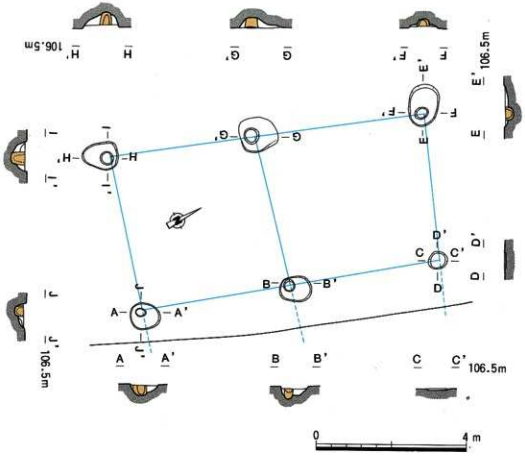
第６図　尾濃遺跡第２次調査区ＳＤ１出土遺物実測図(1)（1/3）



第７図　尾濃遺跡第２次調査区ＳＤ１出土遺物実測図(2)（1/4）



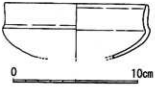
第８図　尾濃遺跡第２次調査区ＳＤ２平面図・土層図（1/100）



第９図　尾濃遺跡第２次調査区ＳＢ１平・断面図（1/100）

ものと考えられる。南北２間（西辺総長8.4ｍ、北から4.5＋3.9ｍ）、調査区内の東西１間分は北辺3.9ｍを測る総柱建物である。柱穴は直径70～110㎝であり、遺存深度は５～40㎝を測る。そのほとんどで柱根が確認でき、柱根の直径22～34㎝で、中には木片が一部残る柱穴も見られる。

柱穴下層から復元口径11.5㎝を測る土師器坏（第10図）が出土している。胎土は精選されており、内・外面とも回転ナデ調整が施されている。



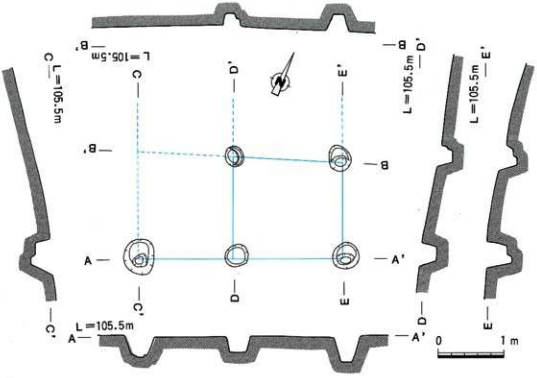
第10図　尾濃遺跡第２次調査区ＳＢ１出土遺物実測図（1/3）

ＳＢ２（第11図、図版５）

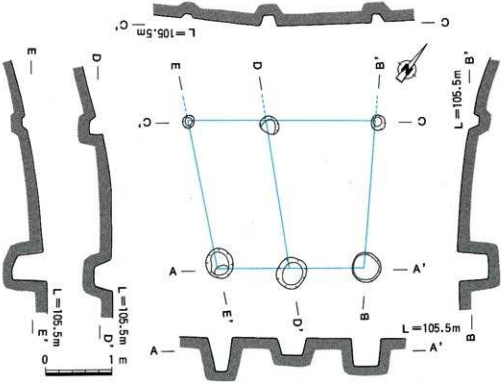
ＳＤ１西側にＳＤ１と平行に並ぶ掘立柱建物跡群の北端に位置する掘立柱建物跡である。東西２間であり、南北は１間分のみ検出できた。地形が南から北に下がっているため、北側部分の柱穴は削平され失われ、柱穴はさらに北側に延びるものと考えられる。東西２間（南辺総長3.1ｍ、西から1.4＋1.7ｍ）、調査区内の南北１間分は東辺1.5ｍを測る総柱建物である。柱穴は直径30～50㎝であり、遺存深度は20～40㎝を測る。

ＳＢ３（第12図、図版５）

ＳＤ１西側にＳＤ１と平行に並ぶ掘立柱建物跡群の北から２番目の位置にある掘立柱建物跡である。東西２間であり、南北は１間分のみ検出できた。地形が南から北に下がっているため、北側部分の柱穴は削平され失われ、柱穴はさらに北側に延びるものと考えられる。東西２間（南辺総長2.2ｍ、西から1.1＋1.1ｍ）、調査区内の南北１間分は東辺2.2ｍを測る総柱建物である。柱穴は直径15～50㎝であり、遺存深度は10～50㎝



第11図　尾濃遺跡第２次調査区ＳＢ２平・断面図（1/60）

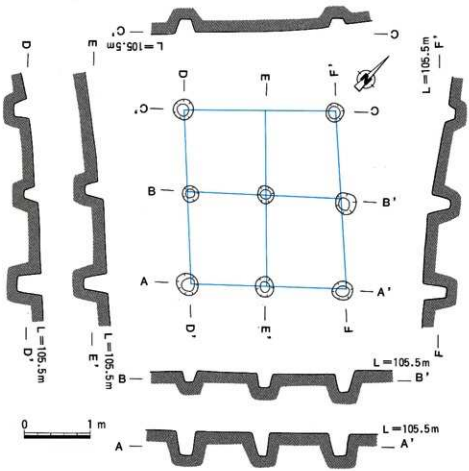


第12図　尾濃遺跡第２次調査区ＳＢ３平・断面図（1/60）

を測る。南辺東西端の柱穴が直径・深度とも規模が大きいため、4隅に大型の柱を配していたものかもしれない。

ＳＢ４（第13図、図版５）

ＳＤ１西側にＳＤ１と平行に並ぶ掘立柱建物群の北から３番目の位置にある掘立柱建物である。各辺とも２間であり、北辺中央の柱穴は確認できなかった。地形が南から北に下がっているため、北側部分の柱穴は削平され失われ、柱穴はさらに北側に延びるものと考えられる。東西（桁行）２間（南辺総長2.2m、西から1.1＋1.1m）、調査区内の南北（梁間）１間分は東辺2.2mを測る総柱建物である。柱穴は直径15～50cmであり、遺存深度は10～50cmを測る。南辺東西端の柱穴が直径・深度とも規模が大きいため、４隅に大型の柱を配していたものかもしれない。



第13図　尾清遺跡第２次調査区ＳＢ４平・断面図（1/60）

ＳＢ５（第14図、図版６）

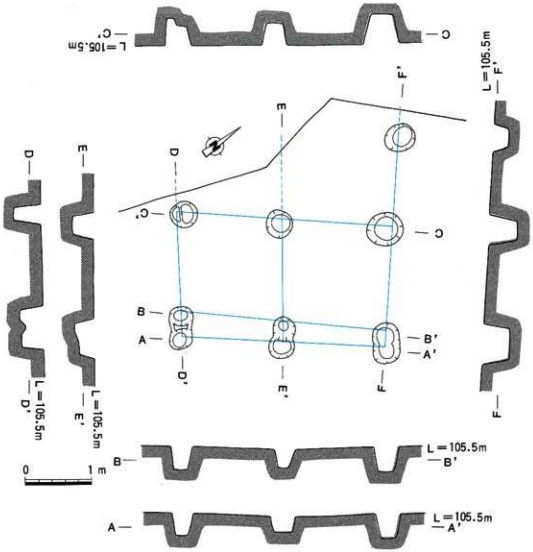
ＳＤ１西側にＳＤ１と平行に並ぶ掘立柱建物群の北から４番目の位置にある掘立柱建物である。南西－北東２間であり、南東－北西は２間分のみ検出できた。北西側が調査区外であるためさらに南東－北西方向に延びる可能性がある。南西－北東２間（南東辺総長3.1m、南西から1.5＋1.6m）を測り、南東辺の柱穴はいずれも２基が切り合っており、建て直しが行われた可能性がある。南東－北西２間（北東辺総長3.3m（３m）、東から1.8（1.6）＋1.4m）を測る総柱建物である。柱穴は直径35－55cmであり、遺存深度は25～45cmを測る。

ｄ）その他の遺構・遺物（第15図）

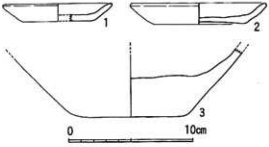
北調査区北端部は、地形の傾斜が最も低い場所であり、ここに低湿地状の粘質土壌が広がる。水田層の存

在が想定されたため、プラントオパール分析を実施したが、その成果は別項、付論の通りである。

第２次調査区における遺構外から、若干の遺物が出土し、図化できるものを第15図にあらわした。１・２は土師質小皿であり、１は復元口径8.8cm、器高1.4cm、また、２は復元口径11cm、器高1.7cmをそれぞれ測る。器面が摩滅しているものの体部は回転ナデ、底部は糸切りであると思える。３は底径９cmを測る壺形土器底部であり、内・外面ともナデによる調整が施されている。これらの遺物から、今回の調査区から遺構の検出が見られないものの、周辺に中世前半及び弥生時代の遺跡が存在することがうかがわれる。



第14図　尾濃遺跡第２次調査区ＳＢ５平・断面図（1/60）



第15図　尾濃遺跡第２次調査区出土遺物実測図（1/3）

2　第５次調査区（第17図、図版６）

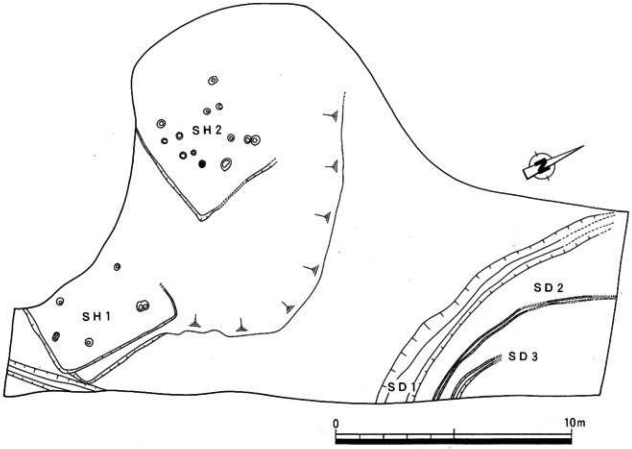
第５次調査区は第２次調査区の約150ｍ北方の求来里川下流域東岸上に位置する。調査区高部の位置に等高線に沿い溝状遺構が走り、東側に向けて順次、地形が下がっていく。調査区南東端には竪穴住居跡が２基確認できた。

a）住居跡

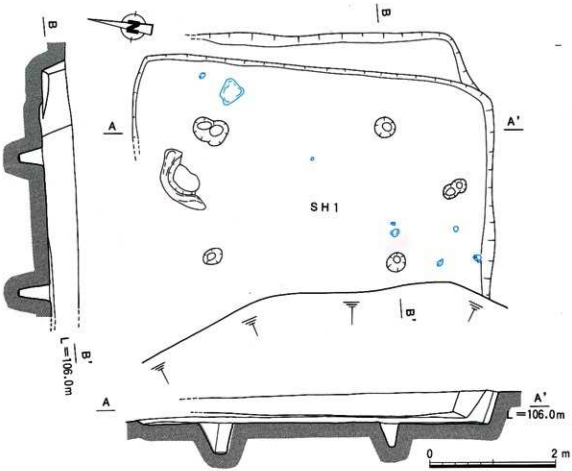
ＳＨ１（第17・18図、図版７・９）

調査区南端に位置する方形竪穴住居跡である。地形の傾斜が東から西に下がり、落ち込み状遺構で削平されているため住居跡の西側部分及び西端の柱穴は確認できなかった。住居跡南北長5.8ｍ、検出面から床面までの最深深度は55㎝を測る。主柱穴は４本と考えられ、深さ35～50㎝である。住居跡北壁中央部よりやや内側に寄った位置に竈跡が確認でき、焼土も残る。なお、東壁外にさらに別の竪穴住居跡壁部が確認できるため、２基の竪穴住居跡が重なっているかあるいはプランの拡張が行われた可能性が残る。

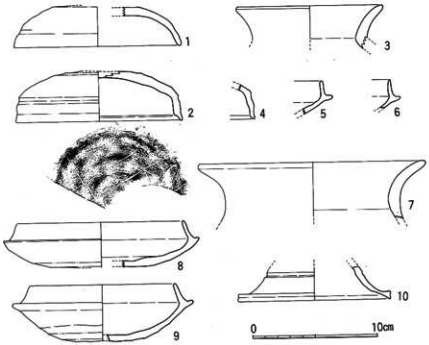
出土遺物は第18図に示した。３・７は土師器であり、その他はいずれも須恵器である。１は復元口径13.2㎝、器高3.2㎝を測る須恵器坏蓋である。内・外面とも回転ナデが施されており、天井部外面には回転ヘラケズリが見られる。２は復元口径13.2㎝、器高４㎝を測る須恵器坏蓋である。内・外面とも回転ナデが施されており、天井部外面には回転ヘラケズリが見られる。なお、天井部内面には彫りの浅いヘラ記号が見られる。８は復元口径13㎝、器高3.5㎝を測る須恵器坏身である。内・外面とも回転ナデが施されており、底部外面は回転ヘラケズリが見られる。９は復元口径11.5㎝、器高4.5㎝を測る須恵器坏身である。内・外面とも回転ナデが施されており、底部外面は回転ヘラケズリが見られる。なお、受け部上面に重焼き痕が見られる。



第16図　尾濃遺跡第５次調査区遺構配置図（1/160）



第17図　尾濃遺跡第５次調査区ＳＨ１（1/60）



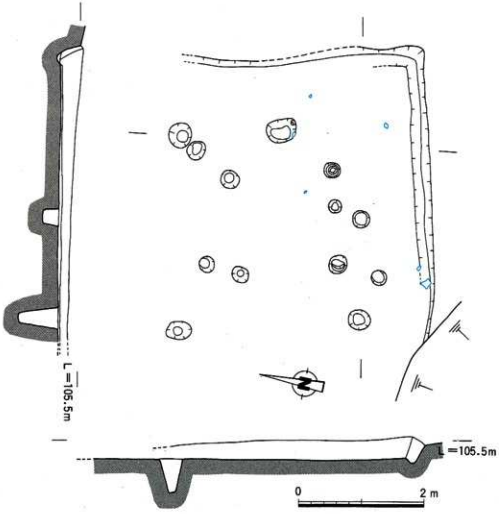
第18図　尾濃遺跡第５次調査区ＳＨ１出土遺物実測図（1/3）

4は須恵器坏蓋、5・6は須恵器坏身であるが、口径を復元できる大きさではなかった。10は須恵器高坏脚部であり、復元脚部径12cmを測る。内・外面とも回転ナデが施され、スカシが見られる。3は復元口径12cmを測る土師器甕である。口縁部は内・外面ともヨコナデが施されている。7は復元口径18.5cmを測る土師器甕である。口縁部は内・外面ともヨコナデが施されている。

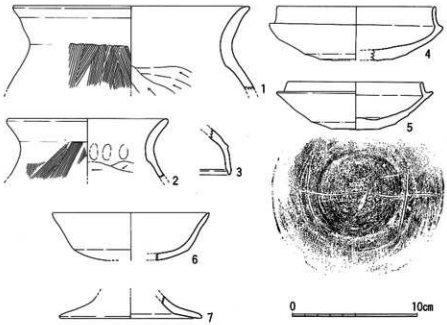
ＳＨ２（第19・20図、図版７・９）

調査区西端に位置する方形竪穴住居跡である。地形の傾斜が東から西に下がり、落ち込み状遺構で削平されているため住居跡の西側部分は確認できなかった。住居跡南北長の正確な数値は明らかでないが５～６ｍの幅におさまると考えられる。検出面から床面までの最深深度は33cmを測る。主柱穴は４本と考えられ、深さ30～64cmである。壁面の最もよく残る住居跡南壁付近には幅約20cm、深さ約10cmの壁溝が残っていた。

出土遺物は第20図に示した。１・２・６・７は土師器であり、３・４・５は須恵器である。１は復元口径19cmを測る土師器甕である。口縁部内・外面にヨコナデ、胴部内面に斜め上方へのヘラケズリ、胴部外面にタテハケをそれぞれ施している。２は復元口径13cmを測る土師器甕である。口縁部内・外面にヨコナデ、胴部内面にヨコ方向へのヘラケズリ、胴部外面にナナメハケをそれぞれ施している。４は復元口径12.5cm、器高4.3cmを測る須恵器坏身である。内・外面とも回転ナデが施されており、底部外面は回転ヘラケズリが見られる。なお、受け部上面に重焼き痕が見られる。５は復元口径11cm、器高3.8cmを測る須恵器坏身である。内・外面とも回転ナデが施されており、底部外面は回転ヘラケズリが見られる。受け部上面に重焼き痕が残



第19図　尾濃遺跡第５次調査区ＳＨ２平・断面図（1/60）



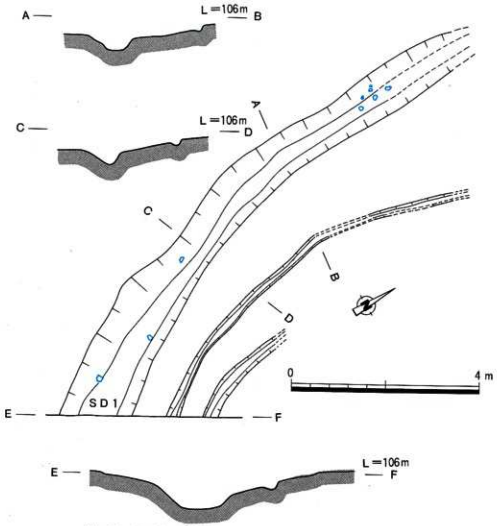
第20図　尾濃遺跡第５次調査区ＳＨ２出土遺物実測図（1/3）

り、底部外面にヘラ記号がみられる。６・７は土師器高坏の坏部と脚部である。色調は明るい橙色を呈し、胎土も精選されている。坏部は復元口径12.5㎝、脚部は復元脚部径11.5㎝をそれぞれ測り、いずれもヨコナデにより調整されている。

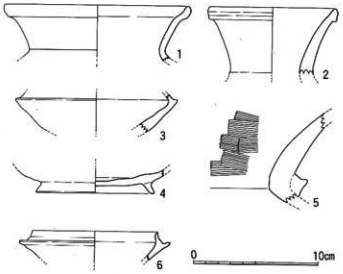
b）溝状遺構（第21・22図、図版７）

調査区北東端の高部の位置に等高線に沿い溝状遺構が３条走っている。最も低い位置に位置するＳＤ１は幅0.8～1.4ｍを測り、その東に並行して位置する幅約0.2ｍ、深さ５～10㎝の２条の溝はＳＤ１の東肩の傾斜の中にあるともみえる。それぞれの溝の床面のレベルはほぼ同じであり、溝の流れがどちらからどちらへ向かうものか判断しにくい。

出土遺物は第22図に示した。１・２・３・４・６は須恵器であり、５は弥生土器である。１は復元口径15㎝を測る壺口縁部であり、内・外面とも回転ナデが施されている。２は復元口径10㎝を測る壺口縁部であり、内外面とも回転ナデが施されている。３は復元受け部径13㎝を測る坏身であり、内・外面とも回転ナデが施されている。４は復元高台径9.5㎝を測る坏の高台部であり、内・外面とも回転ナデが施されている。６は復元口径10㎝を測る須恵器坏身であり、内・外面とも回転ナデが施されている。５は壺頸部であり、外面に断面三角形の突帯を巡らす。外面にはタテハケ、内面にはヨコハケが見られる。



第21図　尾濃遺跡第５次調査区溝状遺構平・断面図（1/80）



第22図　尾濃遺跡第５次調査区ＳＤ１・２出土遺物実測図（1/3）

3　まとめ

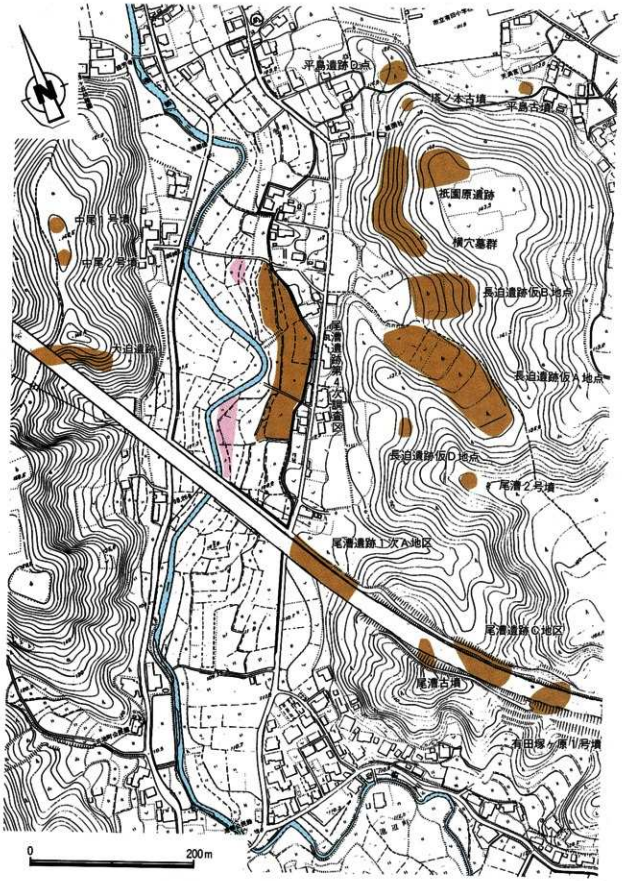
今回調査対象地区とされた第２・５次調査区は、求来里川流域の河岸段丘上の平野部と両側の丘陵部にのびる緩傾斜地に広がる尾漕遺跡の一部に過ぎず、丘陵部も含めると広大な遺跡群の存在が想定できる。今回の調査で、第２次調査区から方形竪穴住居跡１基、溝状遺構２条、大型掘立柱建物跡１棟、掘立柱建物跡５棟が、また、第５次調査区から方形竪穴住居跡２基、溝状遺構４条がそれぞれ検出された。明確な時期が特定できる遺構として、第２次調査区の溝状遺構２条と大型掘立柱建物跡が、６世紀後半代に属することがわかる。また、溝状遺跡と大型掘立柱建物と の位置関係から、大型掘立柱建物跡はＳＤ１に規制されて存在していたものと想定できる。５棟の掘立柱建物跡の柱穴からは資料が得られず、明確な時期は決めがたい。しかしこれらの掘立柱建物群跡はＳＤ１に沿って並び、大型掘立柱建物跡と同様にＳＤ１に配置が規制された様相を持つため、同時存在の可能性が高いものと想定したい。また、第５次調査区からは方形竪穴住居跡２基、溝状遺構４条が検出されているが、方形竪穴住居跡は６世紀後半であることがわかる。このほかにも今回の調査区から弥生土器、奈良時代の須恵器、中世前半の土師質土器などが出土しており、周辺にこれらの時期に属する遺跡が存在するものと考えられる。

それでは、これらの住居跡・掘立柱建物跡・溝状遺構がどのような意義を持つものか、周辺遺跡の同時代の遺構群と照らし合わせながら考えてみたい。

縄文時代は比較的に遺跡は少なく、弥生時代にはいると爆発的に増加する。本調査区東側丘陵頂部北端に位置する祇園原遺跡では弥生時代中期後半～後期中葉の竪穴住居跡・掘立柱建物群跡・甕棺墓群などからなる集落遺跡が発見されている。同様に祇園原遺跡が位置する丘陵北側裾部の平島遺跡でも、弥生時代後期を中心にした甕棺墓・箱式石棺墓・石蓋土壙墓・土壙墓からなる墓地が広がる。また、本調査区西側丘陵の延長部に位置している佐寺原遺跡でも弥生時代中期～後期の竪穴住居跡、貯蔵穴、小児用壺・甕棺墓等からなる集落が発見されており、弥生時代中期～後期にかけて主として丘陵部に集落立地を求めていたことがわかる。しかし、一部には尾漕遺跡第４次調査区に見られるように、若干は平野部でも確認できるが、その主体が丘陵部であることは、大分県下の弥生集落に共通する様相と考えられる。

古墳時代に至ると、尾漕遺跡の東部丘陵裾緩斜面部の長迫遺跡・祇園原遺跡や尾漕遺跡Ａ地区において竪穴住居跡群が確認されているように丘陵上から住居跡が消える。古墳時代後期は、埋葬空間で墓地の立地と生活空間である集落の立地が明確に異なり、生活空間を丘陵裾部あるいは求来里川の河岸段丘状の低位部に求め、埋葬空間は丘陵部を利用する特徴がある。今回調査対象区の周囲に位置する丘陵上には古墳時代中期の中尾１・２号墳、尾漕２号墳、５世紀末～６世紀初頭の尾漕古墳、６世紀後半の有田塚ヶ原１号墳などをはじめとした小円墳の古墳が主として丘陵先端を利用して営まれている。また、このような古墳と同様に、舌状丘陵先端に位置する大迫遺跡は、５世紀中頃～後半の墳墓群で土壙墓、石蓋土壙墓、石棺墓などからなる墓地で、副葬品の様想から26号石棺墓を中心として展開していることが明らかになり、石棺墓と石蓋土壙墓・土壙墓には、階層差が認められる。さらに尾漕２号墳などの地域盟主墳とは階級差も認められる。このほかにも６世紀後半の佐寺横穴墓群、６世紀中葉～７世紀中葉の平島横穴墓群などをはじめ、古墳時代後期に横穴墓が流行することも日田盆地共通の様相である。

奈良時代には、尾漕遺跡の東部丘陵緩斜面部の長迫遺跡では古墳時代に引き続き奈良時代の竪穴住居を中心とした集落跡が、また、尾漕遺跡の求来里川上流域の段丘上に位置する森ノ元遺跡では古代の掘立柱建物を中心とした集落遺跡が発見されている。このほかにも、有田塚ヶ原遺跡では奈良時代の掘立柱建物群が、石ヶ迫遺跡では奈良～平安時代の掘立柱建物跡・竪穴住居跡からなる集落がそれぞれ発見されており、奈良・平安期の集落は古墳時代のそれを継承する場合が多いと考えられる。中世には、多様な集落立地が想定できるが、森ノ元遺跡では掘立柱建物を中心とした集落遺跡が発見され、中には土壙墓から小刀１点、青磁碗・皿をおさめた鎌倉時代の土壙墓が発見されている。掘立柱建物柱穴群の場合、時期の比定が困難であるが、中世集落に付属すると考えられている屋敷墓としての土壙墓の存在に着目するなら尾漕遺跡第１次Ａ地区・尾漕遺跡第４次



第23図　尾漕遺跡周辺の遺跡位置図

調査区などからも確認されており、中世期も多くは前代の集落に継承するもとにあることがわかる。

尾漕遺跡第２・５次調査区の遺構群の時期である６世紀後半の周辺遺跡を見た場合、東側丘陵裾部の祇園原遺跡・長迫遺跡１次Ａ地区・長迫遺跡Ｂ地点・尾漕遺跡１次Ａ地区および求来里川河岸段丘状の低位部に位置する尾漕遺跡第４次調査区に竪穴住居群が広がることがわかる。これらを埋める空間にも住居跡群が存在することが想定でき、広範囲に集落が延び、尾漕遺跡第２・５次調査区の遺構群は集落の最も河川寄りに位置することがわかる。２次調査区に特徴的な溝に沿い配置された５棟の掘立柱建物群はいずれも総柱で２間四方の倉庫であったことが想定できる。同様な遺構群は第４次調査区でも確認されており、河岸段丘の等高線に沿い並行して見られる特徴がある。また、第４次調査区での遺構群を観察すると総柱掘立柱建物跡群（倉庫群）と掘立柱建物跡群、および竪穴住居跡群が纏まりを持ち配置していることもわかる。尾漕遺跡第２次調査区の総柱掘立柱建物跡群（倉庫群）は第４次調査区の南端掘立柱建物跡群と隣接し、これらの掘立柱建物跡群が竪穴住居跡を主体とした集落においては異質であることや、それに隣接して総柱掘立柱建物跡群（倉庫群）が林立することなど、何らかの特殊空間であることがうかがえる。そこで第２・４次調査区が求来里川に隣接する立地条件や、その中でも最も河川寄りに総柱掘立柱建物跡群（倉庫群）が配置されるなど、水運による物資の集積場所であった可能性が考えられよう。

では、この倉庫群にはどのような物資が集積されたのであろうか。まず第１に考えられるのは稲等の穀物類であるが、これらは、基本的に条里状遺構の残る諸留平島、諸留片山地区などの有田川流域に弥生時代前期からの水田溝が確認されており、この地域が稲水田稲作の中心地域であったことが解かる。今回尾漕第２・５地点のプラント・オパール分析結果からは中世の水田層は確認されたが、遺構群と同時期（６Ｃ後半）の水田層はほとんど検出しておらず、求々里川流域の水田開発は中世に行われたものであろう。また、ＳＤ１、ＳＤ２ともプラント・オパールが検出されておらず、この溝が水田水路とは違う機能をもっていたことが理解されよう。

第２に尾漕遺跡を含めた有田塚ヶ原遺跡群で特徴的な生産遺跡としてはクビリ遺跡の奈良時代の鍛冶遺構で、ここでは鎌、刀子などが出土している。この遺構の立地は丘陵斜面下部にあり、このような地形は尾漕遺跡周辺にも多数認められ、この周辺に鍛冶遺構が存在する可能性が高く、その製品等の輸送に本遺跡は関わった可能性が高い。いずれにせよ、本遺跡周辺を日田市教育委員会が大規模に発掘調査を行なっており、それらの成果を踏まえて今後再検討せねばならないであろう。

最後に本稿を書くにあたり、日田市教育委員会行時志郎氏と討議を行ない有益な助言をいただいたことを記す。

（村上・原田）

参考文献

土居和幸・行時志郎編『平成４年度（1992年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1994

土居和幸・行時志郎・松下桂子編『平成５年度（1993年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1995

行時志郎編『平成７年度（1995年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1997

土居和幸編『平成８年度（1996年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1998

友岡信彦・松本康弘編『佐寺原遺跡・尾漕遺跡群・有田塚ヶ原遺跡群』大分県教育委員会　1998

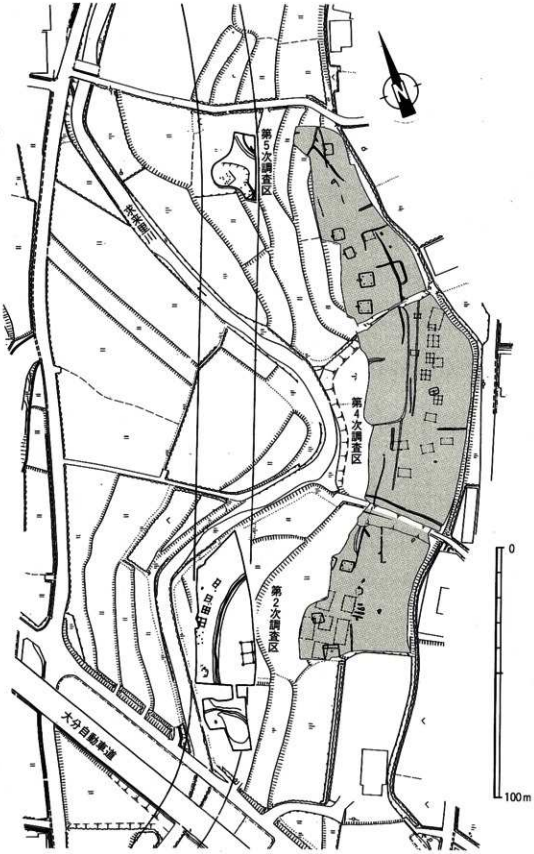
村上久和・友岡信彦・染矢和徳編『日田条里遺跡群・佐寺横穴墓群・大迫遺跡・白岩遺跡・下城垣遺跡』大分県教育委員会　1998

土居和幸・行時志郎・永田裕久編『馬形遺跡』日田市教育委員会　1998

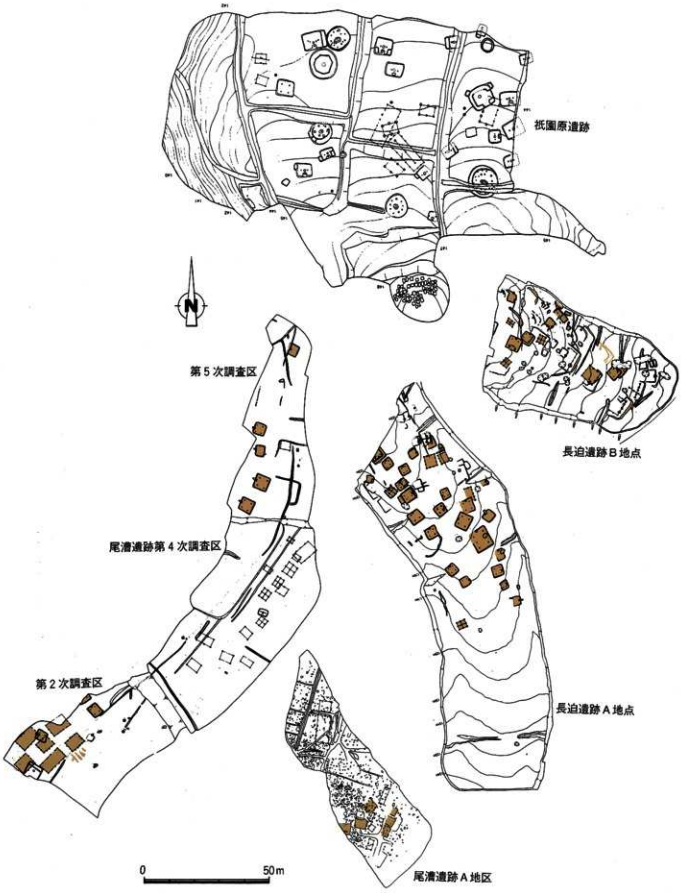
土居和幸編『平成９年度（1997年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1998

上野淳也「尾漕第２遺跡」『大分県埋蔵文化財年報７』大分県教育委員会　1999

首藤　善「尾漕遺跡第５地点」『大分県埋蔵文化財年報７』大分県教育委員会　1999



第24図　尾漕遺跡（第２・４・５次調査区）位置図（1/500）



第25図　尾漕遺跡（第2・5次調査区）周辺遺跡の遺構配置図（1/1500）

付　論

尾漕遺跡土壌のプラント・オパール分析から見た求来里川東岸の水田開発

大分短期大学　助教授　佐々木　　章

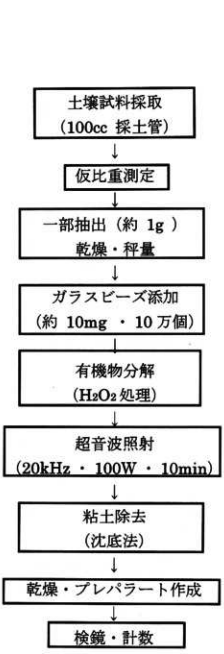
はじめに

求来里川改修工事に伴う尾漕遺跡の発掘調査によって第２次調査区で弥生時代から古墳時代の遺物を含む水路状遺構が検出され、第２次調査区南調査区の東部では水田様遺構が検出された。これらの遺構よりも上位にある土層から分析資料を採取しプラント・オパール分析を行って、水田開発史を明らかにしようとした。尾漕遺跡はさらに北側にも広がっており、耕地整備事業に伴う発掘調査が行われている。また、さらに東側には有田塚ヶ原遺跡群があって林業施設建設に伴う発掘調査が行われている。尾漕遺跡周辺の開発史についてはこれらの発掘調査結果を総合的に考察する必要があるが、今回は第２次調査区と５次調査区の分析結果に基づいて求来里川東岸部の水田開発史に関して考察を加える。

分析方法

第２次調査区北調査区の北東部はやや窪んでおり、壁面には中世以降の水田と畦畔と考えられる断面が認められた。その下位には氾濫原状の堆積が見られ、水田として利用されていた可能性が考えられる。ここでは窪み中央部で上部から底部まで全ての土層から試料を採集した。16層の下位には畦畔の可能性が認められたので0.5ｍほど北西で18層と19層も採取した。また、最深部から1.5ｍ南東では最下部の暗灰色の土層が断続的に認められたので水田土層の流れ込みの可能性を検討するために30層と31層を採集した。さらに２ｍ東南では20層中に暗灰色の粘質土がレンズ状に堆積したいので、この部分も採取した。同じ北調査区で検出されたＳＤ１溝の埋土を２個所で採取した。ＳＤ１溝は求来里川方面から北東方向に掘られており、台形断面の最深部をさらに１段と掘り窪めてあることは特筆される。第２次調査区南調査区ではＳＤ２溝の埋土採取した。この溝は求来里川に向かって流れており、ＳＤ１よりやや古い可能性がある。南調査区の東部で検出された水田様遺構土壌と、南北調査区結合部東断面でも水田様土層から採取した。第５次調査区では南断面の東部と西部でそれぞれ上下に連続して土層ごとに採取した。

プラント・オパールの大きさは50μ程度で、肉眼では観察できない。そのため後代の攪乱や採取時の汚染（コンタミネーション）に対して細心の注意が必要である。そこで、用具をその都度洗浄するなど、注意深く採取して研究室に持ち帰り、第26図に示す手順に従って定量分析を行った。



第26図　プラント・オパール定量分析手順

分析結果及び考察

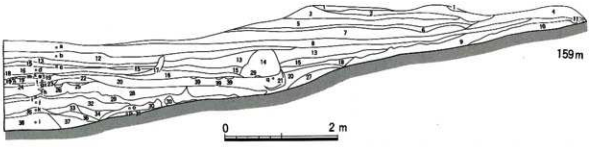
分析結果を植物体重に換算して第28～32図に示す。縦軸は深さ、横軸は広さ10ａ（1,000㎡）土壌中に埋没した植物の地上部乾物重（ｔ）で示してある。イネについては、生産されたであろう籾量も推定してあわせ示した（細線部）。植物体重に換算するには表１の植物体中の珪化機動細胞密度を使った。

現在までに発掘によって畦畔などの遺構が検出された水田遺構の作土層の分析結果では経験的にイネ籾に換算して１（ｔ／10ａ／㎝）を超えることが多い。

５次調査区の８層以上では、この値にはやや及ばないが、比較的に多量にイネ機動細胞プラント・オパールが検出されている。また、２次調査区の北調査区北東部断面の90㎝以上、ＳＤ１溝埋土上部、南調査区の水田様土層、南北調査区連結部の水田様土層も比較的多い。断面では最下層まで少量ながらイネ機動細胞プラント・オパールが検出されるが、ＳＤ１溝最下部とＳＤ２溝では今のところ検出されなかった。初期には上流部には水田が少なかったものと考えられる。

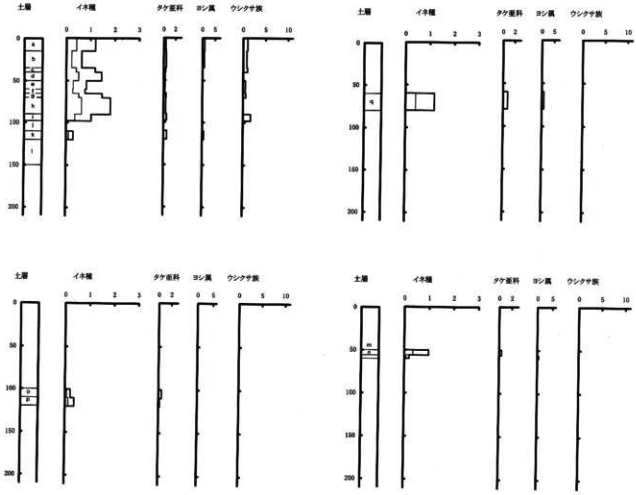
表１　植物体中の珪化機動細胞密度

プラント・オパール分析分類名	代表植物		植物体中密度（10^4個／ｇ）
イ　ネ	イ　ネ	*Oryza sativa*	3.40
ヨシ属	ヨ　シ	*Phragmites communis*	1.44
タケ亜科	ゴキダケ	*Pleioblastus Chino* var *virides* f *pumilis*	20.83
ウシクサ族	ススキ	*Miscanthus sinensis*	2.79

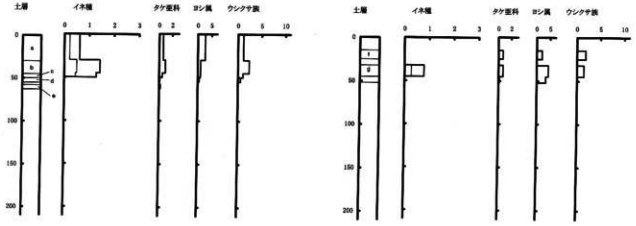


1 黄橙色土
2 橙色土
3 明黄褐色土（鉄分を多く含む）
4 にぶい黄褐色土
5 灰黄褐色土
6 にぶい褐色土（マンガンを多く含む）
7 にぶい赤褐色土
8 灰褐色土
9 明褐色土
10 黄色土
11 赤灰色粘質土（鉄分を含む）
12 暗赤灰色土（鉄分を多く含む）
13 暗赤灰色粘質土（鉄分を含む）
14 赤黒色粘質土（鉄分を多く含む）
15 にぶい赤褐色土（マンガンを多く含む）
16 暗赤灰色土（マンガンを多く含む）
17 暗灰黄色砂質土（鉄分を含む）
18 暗青灰色土（鉄分を多く含む）
19 黄褐色砂質土（鉄分を多く含む）
20 赤灰色土（鉄分を含む）
21 明褐色土（鉄分を含む）
22 灰褐色土（鉄分を含む）
23 灰褐色土（鉄分を含む）
24 暗灰黄褐色土（鉄分を多く含む）
25 にぶい赤褐色砂質土
26 にぶい赤褐色砂質土
27 明褐色土
28 暗青褐色土
29 暗黒灰色土
30 暗灰色土
31 暗青灰色粘質土
32 灰褐色土
33 暗赤灰色土
34 暗灰色砂質土
35 黄灰色砂質土
36 赤褐色砂質土（鉄分を多く含む）
37 明褐色砂質土
38 灰色砂質土
39 青黒色粘質土

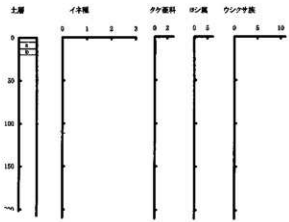
第27図　尾濃遺跡第２次調査区東北部壁面断面図

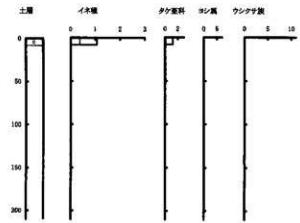


第28図　尾濃遺跡第２次調査区東北部壁面土壌（第27図）のプラント・オパール
密度から推定した埋没植物量（ｔ／10ａ／㎝）

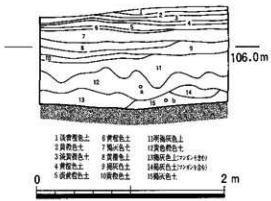


第29図　尾濃遺跡第２次調査区ＳＤ１土壌（第５図）のプラント・オパール
密度から推定した埋没植物量（ｔ／10ａ／㎝）

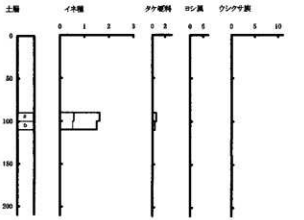




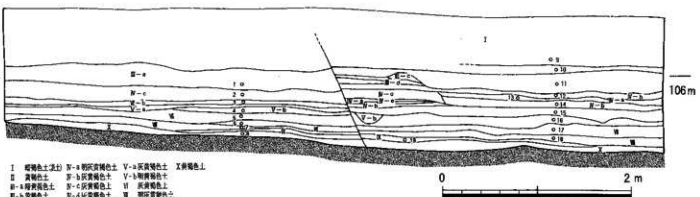
第30図　尾濃遺跡第２次調査区ＳＤ２土壌（第８図）のプラント・オパール密度から推定した埋没植物量（ｔ／10ａ／cm）



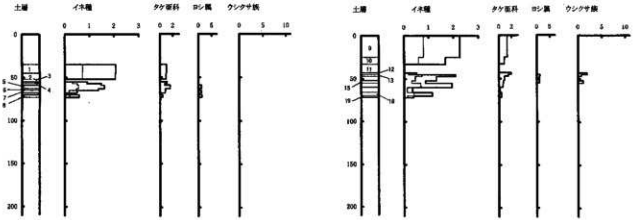
第31図　尾濃遺跡第２次調査区南北連結部東部壁面断面図（1/40）



第32図　尾濃遺跡第２次調査区南北連結部東部壁面土壌（第31図）のプラント・オパール密度から推定した埋没植物量（ｔ／10ａ／cm）



第33図　尾濃遺跡第５次調査区南壁面断面図（1/40）



第34図　尾濃遺跡第５次調査区南壁面土壌（第33図）のプラント・オパール密度から推定した埋没植物量（ｔ／10ａ／cm）

写 真 図 版

図版1

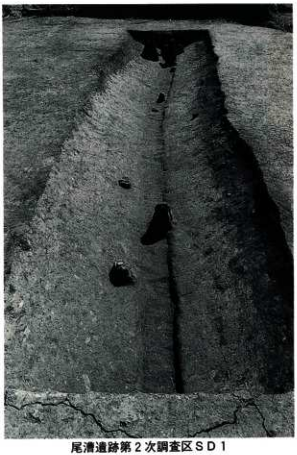
尾濃遺跡第２次調査区遠景（西から）

図版2

尾清遺跡第2次調査区（上空から）

尾漕遺跡第２次調査区ＳＨ１

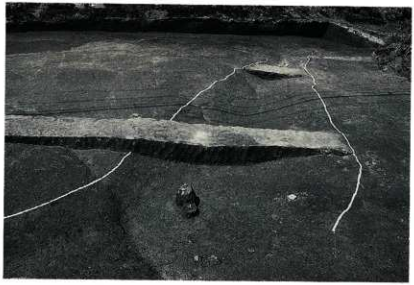
尾漕遺跡第２次調査区ＳＤ１
（中央から南側を望む）



尾漕遺跡第２次調査区ＳＤ１
（中央から北側を望む）

図版4

尾濃遺跡第２次調査区ＳＤ２
（北西から）



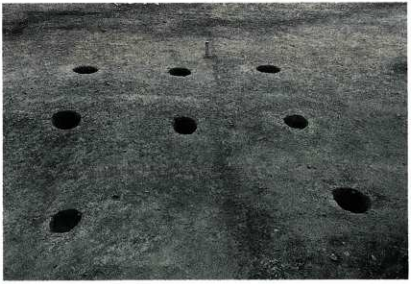
尾濃遺跡第２次調査区ＳＤ２
（南東から）

尾濃遺跡第２次調査区ＳＢ１

図版5

尾濃遺跡第２次調査区ＳＢ２

尾濃遺跡第２次調査区ＳＢ３



尾濃遺跡第２次調査区ＳＢ４

図版6

尾濃遺跡第２次調査区ＳＢ５

尾濃遺跡第５次調査区調査風景

尾濃遺跡第５次調査区遠景

図版7

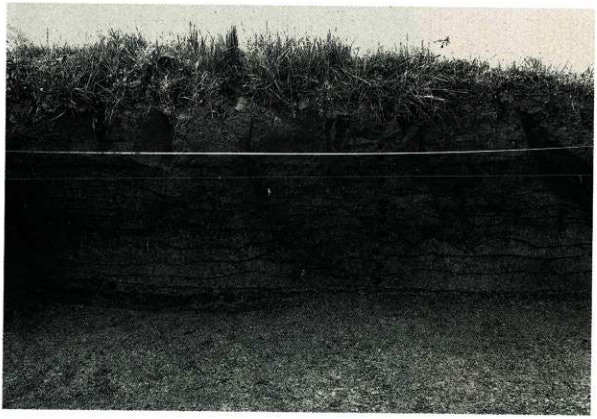
尾濃遺跡第５次調査区ＳＨ１

尾濃遺跡第５次調査区ＳＨ２

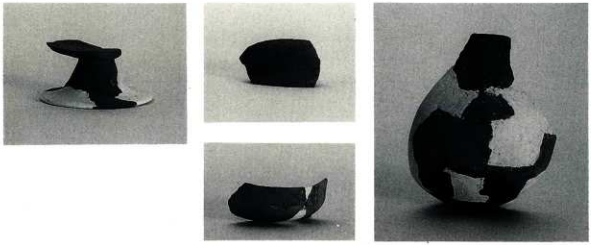
尾濃遺跡第５次調査区
ＳＤ１～３

図版8

尾濃遺跡第５次調査区プラント・オパール採取場所(1)

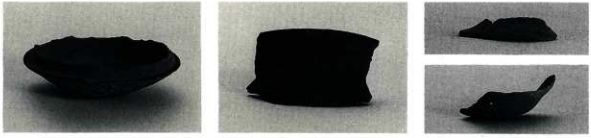


尾濃遺跡第５次調査区プラント・オパール採取場所(2)



尾濃遺跡第２次調査区ＳＤ１出土遺物

尾濃遺跡第５次調査区ＳＨ１出土遺物



尾濃遺跡第５次調査区ＳＨ２出土遺物

報告書抄録

ふ り が な	おこぎいせき（だい２じちょうさく・だい５じちょうさく）
書　　名	尾漕遺跡（第２次調査区・第５次調査区）
副 書 名	局部改良求来里川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査書
巻　　次	
シリーズ名	大分県文化財調査報告書
シリーズ番号	第112輯
編 著 者 名	村上久和・原田昭一・佐々木章
編 集 機 関	大分県教育委員会
所　在　地	〒870－8503　大分市府内町３－10－１ 〒870－1113　大分市中判田1977 大分県文化課文化財資料室
発行年月日	2000年３月31日

ふりがな 所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	期査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
おこぎいせき (だい２じちょうさく・ だい５じちょうさく) 尾漕遺跡 （第２次調査区・ 第５次調査区）	大分県 日田市 大字西 有田字 尾漕	651	177	33° 19′ 35″	130° 58′ 05″	(第２次調査区) 970729 ～970930 (第５次調査区) 971027 ～971106	(第２次調査区) 1,500 (第５次調査区) 300	局部改良求 来里川改修 工事に伴う 埋蔵文化財 発掘調査書

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
尾漕遺跡 （第２次調査区・第５次調査区）	集落	古墳時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 溝状遺構	須恵器・土師器	

尾瀧遺跡（第２次調査区・第５次調査区）

－局部改良来栖里川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査書－

大分県文化財報告書第112輯

平成12年３月31日

編　集　大分県教育庁文化課（文化財資料室）

〒870-1113　大分市中判田字ビワノ門1977番地

TEL (097)597－5675

発　行　大分県教育委員会

〒870-0021　大分市府内町３丁目10番１号

TEL (097)536－1111

印　刷　得丸デザイン印刷